様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ９ 月　 ６ 日現在

機関番号：１０１０３
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｈ０３４６０

研究課題名（和文）中国の一帯一路構想の系譜とエスニシティのネットワークを介した対外文化戦略の研究

研究課題名（英文）The Regacy of the Belt and Road Initiative and China's International Cultural Strategy through Ethnic Networking

研究代表者
松本　ますみ（MATSUMOTO, MASUMI）

室蘭工業大学・大学院工学研究科・教授

研究者番号：３０３０８５６４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　10,400,000円

研究成果の概要（和文）：本科研で以下の点が明らかになった。第一に、古代からの道のつながりという文脈で、沿線国の歴史の古さが強調され、西欧的普遍的価値は「新参外来思想」として等閑視される。第二に、シルクロード言説の政治利用は、その時代時代の超大国によってなされてきた。第三に、孔子学院というソフトパワーを用い、親中派を育成し、影響力の拡大を図っている。第四に、反テロキャンペーンや宗教中国化、宗教リスク論により、信教の自由が制限されている。国内の宗教信仰者が厳しい立場にあり、以前のような自由な国外移動は厳しい。第五に、2016年までは、イスラーム諸国との商取引の媒介者であったムスリムに代わり、英語を話す漢人が表に出てきた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
一帯一路構想は中国を中心にした世界秩序の再構築を呼びかけるものとなっている。対外的には資金援助・投資とソフトパワーを発揮し、その強大な資本力による影響は大きい。しかし、対内的には、2016年以降、対宗教介入が激しさを増し、宗教的エスニシティは大きくその行動を制限されるようになった。すなわち、対外開放と対内引き締めは矛盾しつつ両輪の輪のように動いており、中国の多民族性の優位点を利用しきれていない。

研究成果の概要（英文）：This project reached the following findings. First, in the discourse of the Belt and the Road Initiative, the oldness of the Silk Road becomes more important tie. Second, the discourse of the Silk Road and its geopolitical significance has been utilized by the big economic powers for centuries repeatedly. Third, the soft power of the Kongzi Institute has been fully employed to boost pro-Chinese international atmosphere in the countries along the Belt and Road Initiative. Fourth, the freedom of religion has been under the strict control through the anti-terror campaign, the Sinicization of religions, and the appearance of the discourse of “religious risks” after 2016. This campaign affects religious faith and suspends free international migration flow. Many Muslims with the Islamic learning experience have now lost the Islamic career. Fifth, in place of Muslims in China, English speaking Han Chinese has become the main actors of international trade with Islamic regions.

研究分野：中国近現代史

キーワード：エスニシティ　越境　宗教　一帯一路　イスラーム　英語学習　ソフト・パワー　多民族

１．研究開始当初の背景

報告者や研究分担者は、1999 年から断続的に約 15 年間、中国のムスリム居住地帯や朝鮮族居住地帯、内モンゴル自治区で民族学的調査を行ってきた。調査により、国境を越えた商業活動や学習など、エスニシティの特徴を生かした活動が顕著に行われると同時にイスラーム復興が顕著なものとなったことがわかった。さらには、旧ソ連圏のドンガン人の里帰り中国留学など、交流が旧ソ連崩壊以降盛んに行われてきたのを目の当たりにしてきた。そんな折、2013 年に習近平主席がカザフスタン訪問中に「一帯一路」構想を打ち出した。この「一帯一路」構想により、国境を越えたエスニシティ間の交流はさらなる発展を遂げるのではないか、中国はその多文化性に棹差して、さらなるグローバルな発展を遂げるのではないか、と予想を立てた。そして、その動態と歴史的文脈をさぐることによって、中国の今後の多文化主義のあり方を予想しうるのではないか、というのが研究開始当初の背景であった。

２．研究の目的

本研究は、中国の習近平主席が打ち出した「一帯一路」構想に付随して、中国周縁のエスニシティの越境性が高まり、その活動が構想に棹差すのではないか、という予想のもとに彼らの活動の背景、動機と文化変容をさぐるべく行われた。同時に、新シルクロード構想とも言われる当該構想に関して、その歴史的背景を史料に基づき探ることで、中国の今後の論理を明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

まず、歴史学的方法（史料に基づく検証）と、文化人類学的方法、社会学的方法（訪問インタビュー、定点観察）に基づき、過去と現在の共通性を浮き彫りにするという方法を用いた。

４．研究成果

(1)戦前戦中戦後の日本の対中央アジア、大陸イスラーム工作に関する史料と言説をまとめることで、日本のイスラーム研究の源流と国策性を論じた。同時に、東アジアの覇権国家（20 世紀の日本、21 世紀の中国）が「大国」としてイスラーム世界に注目する動機、目的、手段に類似点があることを見出した。

(2)現在の一帯一路構想の言説を分析し、なおかつ現地調査をすることによって、21 世紀の世界秩序の再構築を狙う中国政府の文化戦略を明らかにした。その中で、対内的に新しいナショナリズムのあり方が示され、それに沿うように言説が構築されていることが明らかになった。国内で宣伝されている新中華民族言説は、歴史の記憶と仮想の文化的同一性に基づくものとなっている。必ずしも「血統の同一性」を意味しないが、時に応じて「黄帝の子孫」「龍の子孫」といった伝統が持ち出され、一体感を上から感じさせる教育、メディアシステムとなっている。それは、現在の中国の領域内の「人民」だけでなく、移民の子孫をも含む。例えば、国境を接するカザフスタンの東干人は 19 世紀に中国の戦乱を逃れて移住したムスリムの子孫であるが、カザフ人、ムスリムというアイデンティティよりは、むしろ「中華民族」の一員としたいという思惑が中国側にはある。

(3) 一帯一路構想が提出されてからは「大国意識」「中華民族」意識の強調とともに、中国の多民族性・多元性、特に宗教の多様性を否定し、政策においても愛国と愛党という「単一の価値」の尊重が顕著となっている。それは、人口の 7.6%を占める「少数民族」を大事にする、という建国以来の建前から現在の国家方針がそれはじめたということである。例えば、民族言語による教育が大幅に縮小されたり、宗教的エスニシティの宗教活動・宗教教育が制限されたりという点にも現れる。また、ムスリム人口が多い新疆は、過去から一貫して中国の固有の領土、と公的歴史的記述も書き換えられる。同時に、単一の方向に向かう教育システムが重要視される。漢語と英語を「武器」として「中華民族」を世界に送り出すという「走出去」政策と国際ビジネス戦略がとられている。具体的には、対外的には孔子学院の増加と親中派の養成を図ることでソフトパワーの増大化をはかっている。また、対内的には、愛国教育と共産党への忠誠に加え、全国の小学校レベルからイマージョン教育が取り入れられ、英語教育の強化が国家戦略の一環として広範囲にとられている。同時に、さらなる「世俗化」が推進されている。具体的には、中国社会科学院が先導した「宗教リスク論」のあおりを受け、宗教活動に大きな制限が加えられている。一帯一路構想以前では、宗教的エスニシティである回族は宗教教育によって養成されたアラビア語人材として、特に対中東貿易や商業活動において珍重されていた。ところが、それは宗教的活動と混同されやすい、ということで、アラビア語通訳の活躍の場が狭まっている。さらには、「対テロ対策」という名目のもと、インターネット上での「宗教へのヘイトスピーチ」もかなり野放し状態となっている。そこには、グローバル化の中で、中国国内だけはグレートファイヤーウオールの中に囲い込み、「宗教の無菌状態」を形成したいという思惑がみえる。

(4)一帯一路構想は、中華人民共和国成立以来の民主集中制と党による指導を中国国内で強化するとともに、経済的には中国国外と連携するあるいは、投資を行う、というダブルスタンダードをもつ。すなわち、西欧由来の「自由、民主、平等、人権、三権分立」といった普遍的価値を、中国から一掃するとともに、党の認めた新中国的価値（党への服従、権威への服従、拝金主義）をもう一つの価値として発展途上国に持ち込み、世界地図を塗りなおそうという企図を

もつ。そこでは、少数者（少数民族、民主運動家、信仰を持つもの等）を犠牲にすることはほとんど問題にされず、一帯一路沿線の国々の人たちとともに「ウィンウィン」で儲けることが大事とされる。この考え方は、ベンサムがかつて主張した「最大多数の最大幸福」論に基づく功利主義的な考え方と、多数派漢族の少数民族、周辺国家のエスニシティに対する伝統的蔑視観によって合理化されている。従って、研究開始当初の「周縁エスニシティによるネットワーク化による中国の大国化」「多民族性に棹差した発展」という予想は大幅に裏切られた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　31　件）

奈良雅史「現代中国における宗教的状況をめぐる人類学的研究――二重の宗教的正統性と宗教実践のもつれ」『社会人類学年報』42 巻　2016、143－155

島田大輔「占領期『内外タイムス』の研究　1946-1953（上）――経営と紙面分析」『メディア史研究』41 巻、2017 年、43-67

島田大輔「占領期『内外タイムス』の研究　1946-1953（下）――1950 年代における『内外タイムス』の台湾進出」『メディア史研究』42 巻、2017 年、112-134.

新保敦子「中国における一帯一路構想下の小学校英語教育」『学術研究』66 巻、2018、46-66

楊海英「王昭君をめぐる中国人の苦悩――観光資源における歴史の政治利用の一例」静岡大学人文社会科学部アジア研究センター『アジア研究』13 巻、112－134

松本ますみ「寧夏山間地回族の「20 年の大災厄」の記憶とイスラーム復興」『中国２１』28 巻、2018、167-192

権寧俊「韓国における『華僑』の定義と中国朝鮮族」『東アジア日本学研究』1 巻、2018、141-149

BITABAROVA Assel, “Unpacking Sino-Central Asian Engagement along the New Silk Road: a case study of Kazakhstan”, *Journal of Contemporary East Asia Studies,* Vol.7-2, 2018, 149-173.

他　23 篇

〔学会発表〕（計　44　件）

松本ますみ「一帯一路構想の中での「鄭和」言説――中華民族の英雄か回族の英雄か」『国際シンポジウム　中国における歴史の資源化――その現状と課題に関する人類学的分析――』（招待講演）（国際学会）2016 年 10 月 22 日、国立民族学博物館（大阪府吹田市）

MATSUMOTO, Masumi “Islamic and Chinese Peripheral Studies in Imperial Japan-A Problem of Japan’s Sinology and the Legacy of Romanticized Silk Road Discourses. *China and the Indian Ocean: Discovering and Sharing Mutual Cultural Heritage, 2016 Zheng He Forum, Zheng He International Peace Conference*, （招待講演）（国際学会）、2016 年 6 月 5 日、Hyatt Regency Dubai Creek, Dubai, UAE.

松本ますみ「日本の回教工作」『華北交通写真シンポジウム』（招待講演）2016 年 12 月 18 日、日本カメラ博物館（東京都千代田区）

NARA Masashi, “Keep on Moving: Informal Islamic Pedagogical Activities amongst Hui Muslims in Contemporary China, *International Conference Ethnographies of Islam in China*、2017 年、3 月 28 日、SOAS, London, UK.

新保敦子「一帯一路構想下中国的外語教育与日本的外語教育」「一帯一路戦略背景下民族教育発展国際学術研討会」（招待講演）（国際学会）、2016 年 10 月 22 日、寧夏大学（銀川市、中国）

権寧俊「東アジア諸国における『多文化共生』社会の実態と課題」『第五回中日韓朝言語文化比較研究　国際シンポジウム』（招待講演）（国際学会）、2017 年

OHNO Akira, Mongolian Genocide during the Chinese Revolution. 80th A*nniversary of Political Victims Commemoration*, （国際学会）、2017 年

Yang Haiying, Pictures and Manuscripts related to the Ordos Mongol in Belgium, *Kozlov’s Museum*, Petersburg, Russia（招待講演）、（国際学会）、2018 年

NARA Masashi, A Change in the Ethnicity/ Religiosity of the Hui People and Tourism Development: A Case Study of Hui Muslim Society in Yunnan Province, I*nternational Symposium “Ethnicities in China and their Interaction with Global Society in the era of BELT and ROAD INITIATIVE*, at Waseda University, （国際学会）、2018 年

他 35　件

〔図書〕（計　　31 件）

楊海英『モンゴル人の民族自決と「対日協力」』集広舎、2016 年　全 386 ページ

LIPMAN, Jonathan ed. *Islamic Thought in China――Sino-Muslim Intellectual Evolution from*

the 17th-21st Century, Edinburgh University Press, 268 pages.
Kamurul Hossain and Anna Peretei eds, *Understanding the Many Faces of Human Security*, Brill, 2016, 254 pages.
新保敦子・阿古智子『超大国・中国のゆくえ　勃興する「民」』 東京大学出版会、2016 年、256 ページ
阿古智子編　大澤肇、新保敦子他『変容する中華世界の教育とアイデンティティ』国際書院、2017 年、306 ページ
貴志俊彦、白山真理編『京都大学人文科学研究所所蔵　華北交通写真資料集成（論考編）』国書刊行会、2016 年、349 ページ
朱永浩、権寧俊他『アジア共同体構想と地域協力の展開』文真堂、2018 年、248 ページ
楊海英『独裁の中国現代史――毛沢東から習近平まで』
奈良雅史他『フィールドワーク――中国という現場、人類学という実践』風響社、2017 年、550 ページ
楊海英『「中国」という神話――習近平「偉大な中華民族」のウソ』文藝春秋、2018 年、240 ページ
楊海英『モンゴル人の中国革命』筑摩書房、2018 年、320 ページ
楊海英編著『「知識青年」の 1968 年――中国文化大革命と辺境』岩波書店、2018 年、208 ページ
新保敦子『日本占領下の中国ムスリム――華北および蒙疆における民族政策と女子教育』2018 年、384 ページ

他　　18 件

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
中国の一帯一路構想の系譜とエスニシティのネットワークを介した対外文化戦略の研究
http://hdl.handle.net/10258/00009837

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：　清末　愛砂

ローマ字氏名：KIYOSUE Aisa

所属研究機関名：室蘭工業大学

部局名：工学研究科

職名：准教授
研究者番号（8 桁）：00432427

研究分担者氏名： 奈良　雅史
ローマ字氏名：NARA Masashi
所属研究機関名：北海道大学
部局名：メディア・コミュニケーション研究院
職名：准教授
研究者番号（8 桁）：10737000

研究分担者氏名： 権　寧俊
ローマ字氏名：KWEON Yongjun
所属研究機関名：新潟県立大学
部局名：国際地域学部
職名：教授
研究者番号（8 桁）：20413172

研究分担者氏名： 大野　旭（楊　海英）
ローマ字氏名：OHNO Akira (Yang Haiying)
所属研究機関名：静岡大学
部局名：人文社会科学部
職名：教授
研究者番号（8 桁）：40278651

研究分担者氏名： 小林　敦子（新保　敦子）
ローマ字氏名：KOBAYASHI Atsuko
所属研究機関名：早稲田大学
部局名：教育・総合科学学術院
職名：教授
研究者番号（8 桁）：90195769

(2)研究協力者
研究協力者氏名： アセリ・ビタバローヴァ
ローマ字氏名： BITABAROVA Assel

研究協力者氏名： 島田　大輔
ローマ字氏名： SHIMADA Daisuke

研究協力者氏名： 馬　強
ローマ字氏名： MA Qiang

研究協力者氏名： フランチェスカ・ロサティー
ローマ字氏名： ROSATI Francesca

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。